



## スラム育ちの女性外交官活躍

やぎさわ かつまさ  
八木沢 克昌

●公益社団法人シャンティ国際ボランティア会・アジア地域ディレクター

今年のタイは干ばつと異常な暑さで5月の中旬となっても連日40度近い体感気温の毎日。5月22日は、世界を震撼させた軍事クーデターから2周年の日。8月には新憲法草案の賛否を問う国民投票が予定されている。軍事政権側は、政権に批判的な政治家、活動家や記者らを「態度矯正」と称して身柄を拘束する等、報道の自由や表現の自由、集会も制限されて民主国家とは程遠く国民の批判は高まるばかり。

隣国のミャンマーが軍事政権から民政移管し、歴史的総選挙で圧勝したアウン・サン・スーチー党首が率いる国民民主連盟（NLD）が4月から新政権を担うのとは対照的だ。ミャンマーからもタイは軍事政権で世界的な民主主義の時代に逆行していると心配される程。国の底辺を支える都市や農村の貧困層と既得権を持つ都市の中間層や富裕層との国民和解には程遠い状態。

バンコクとその周辺も含めて約2,000カ所、200万人がスラムに住む。バンコクのスラムの存在はタイの階級社会と貧富の格差の象徴だ。バンコクの人口の4人から5人に1人がスラム人口。バンコクの中心部だけを見渡せば中進国としてのタイ。在タイの日本人も登録ベースでも67,000人（2016

年1月、在タイ日本大使館）を今年には超えた。日系の企業も4,567社（2016年4月JETRO）。大半の日本人はこうしたスラムの人々の生活や問題を知ることは少ない。

今年の5月19日から20日、ロシアのソチで行われたロシアとタイの首脳会議。タイを代表して参加したのが2年前のクーデターで政権を取った軍人のプラウィット暫定首相。ロシアはプーチン大統領。タイの暫定首相とロシアの大統領の通訳を務めたのが、タイの首都バンコクのスラムで生まれ育ったオラタイ・プーンブンラーブさん（37）。両国の首相と大統領の隣で通訳するオラタイさんの姿は、タイのテレビや新聞でも連日大きく報道されていた。



オラタイさんと幼少のころ大好きだった絵本【筆者撮影】

オラタイさんはタイ外務省の一等書記官として第一線で活躍。これまでもプーチン大統領とタイのチュラポン王女の会談などでも通訳を務めた。昨年ロシアのメドヴェージェフ首相がタイを訪れた際に通訳を務めた。これまでに仕事で訪問した国は21カ国に及ぶ。

オラタイさんは高層ビルが林立するバンコクの中心部に近いスアンブルー・スラムで、タイ東北部出身の両親の三女として生まれた。迷路のような狭い路地に板張りの貧しい家がひしめく。母親は文字の読み書きができず、ソムタム（パパイヤサラダ）などの惣菜を売って暮らしていた。「クロントイ港で荷役の仕事をしていた父親は稼いだお金でお酒を毎日飲んでしまい、母親とお金のこと喧嘩ばかりしていました」。狭い家に響き渡る怒鳴り声に耐えきれなかったと幼い日々の想い出を語るオラタイさん自身は、小学2年生頃までは病弱で、母親に毎週のように病院に連れていかれた。学校を1ヵ月以上も休んだこともあったという。

そんなオラタイさんの人生を変えたのは、自宅の近くに出来た図書館だった。当時のスラムで少女が目にしたものは、酒や麻薬に依存する人々、暴力、そして、貧困。両親の怒鳴り合いが始まると、泣いて図書館に駆け込んでいたという。その図書館は、1984年にスラムの民家を改造して設けられた。私たちシャンティ国際ボランティア会が住民と協力して建設。スラムでの活動の原点と言える。絵本、雑誌、小説、旅行記、世界の偉人伝、教科書など約6,000冊を揃えた。

「旅行記をめくると京都のお寺、中国の万里の長城、ニューヨーク、パリ、モスクワなどの写真が次々と現れてくる。世界の広さにわくわくしました」。両親の喧嘩からの逃げ場だった図書館は、いつしか夢を紡ぐ場所になった。

「自分もスラムから抜け出して大きな世界を見

てみたい」。本が世界への扉を開いた。

小学生の頃から、図書館で本を借りて来ては、親の手伝いの合間にむさぼるように読んだ。朝4時に起きて、母と一緒に惣菜を売った。夜遅くまで店に立ち、寝るのは毎日11時を過ぎた。タイ名門の国立チュラロンコン大学に合格。外交官を志したが、階級社会のタイでは「貧乏なスラム出身者には無理」と諦めかけた。しかし、100倍近い競争率の外交官養成のための奨学金試験に一発で合格。ロシアの大学院を卒業し外交官の夢を実現した。今ではタイ外務省のロシアの専門家として、両国の大統領、首相、王室などの要人の通訳には欠かせない存在になった。

スラムには麻薬がはびこり、幼なじみには麻薬に手を染めて刑務所に収監された人もいる。「図書館がなく本と出合わなければ、自分も犯罪に手を染めていたかもしれない」と話す。

二人の姉は、両親の喧嘩に耐え切れずに家を出てしまったという。「貧困から抜け出すには教育しかない。貧しくてもきっと道は開けます。生まれる場所は選べないが、生きる道は選ぶことが出来ます。図書館が私を世界に導いてくれました」。

タイの外交官は女性の方が多いといい、実力主義の組織でやりがいを感じている。1年半前に結婚したシンガポール人の夫は孤児から実業家となり成功したので仕事にも協力的だ。将来の目標は、大使になることだ。



ロシアのプーチン大統領とタイのプラウィット暫定首相の会談の通訳をするオラタイさん（左）[タイ外務省ホームページから]